

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです

**勉強して夢と希望をもち、自分がいま取り組んでいること、
これから取り組まなければいけないことに生命をかけなさい。**

人は日々さまざまなことに挑戦し、成長し、自己の人間性を高める旅の途上にあるのだと思います。自らの長所を発見し、その長所をもって社会や人々に貢献することが使命です。どんな人間でも生まれたからには、使命、役割がある。その使命を果たすべく、長所を授かって生まれてきました。だから、自らの長所を伸ばし、その長所を発揮して生きることだけ考えれば、おのずと使命にたどり着くのです。長所にまだ気づいていなければ、目の前のこと、やらなければいけないことに全力で打ち込んでごらん。必ず、あっこれだ！と思うことにぶつかる。楽しく、ワクワクできて一日中励んでも時間が気にならないことに。それが長所だよ。船井幸雄が船井総研の代表取締役を退いて一週間後。新入社員の入社式。私は特別な気持ちで、新社員に訓話をしていました。私のあとに、船井先生が話すことになっています。おそらく、新社員、これから社会に飛び出す若者に対し、その記念すべき日、話をしてくれる最後の日ではないか？と感じていました。私の入社当時からみれば、比べられないほど優秀な、そして夢に溢れた若者たちが顔を輝かせて座っています。私は、志を与えられたのだな。熱心にメモをとりながら私の話を聞いてくれる新社員たちを見ていて思いました。25 年前の 11 月のあの日。いまの私と同じ年だった船井先生に、志を与えられたのだと思えたのです。「働くということとはな、生まれた役割を果たすことだぞ、覚えておきなさい」そのとき、君の役割はこれだと、船井先生は私に教えませんでした。いや、旅立たれるまで、私の役割を先生が語ることはありませんでした。しかし、役割を発見するプロセスを、いつもいつも語ってくれていました。社長車の運転をしているとき、ふてくされて後ろ向きになっていたとき、何かに気づき船井先生に飛ぶように報告にいったとき、我が子の誕生を少し悲しい気持ちで告げたとき……。遠い地平におぼろげながら役割という憧れていた、憧れ続けていたものが見えはじめていました。「役割を発見し、確信する、その旅路に自らが成長するための課題がすべてあるのだな」と、25 年経ったその日、後輩に話しながら確信していました。そのとき私は、25 年前の自分に語っていたのかもしれませんが。役割を発見する旅に出る志を、確かにあの日、船井先生から授けられたのです。その志を、いま会う人々に継承してもらうべく語る。それも使命なのだ、心から思えました。船井先生が語りだしました。「人間の本質は生まれ変わることにあります。死んだら終わりではないのですよ」何度も何度も、人は生まれ変わり、人間性を高めるためのテーマを自ら決めてこの世に生まれ、そのテーマを解決して次の生へと旅立つ。人生観、死生観を船井先生は若者たちに語ります。どのように生きるべきか？その足元をまず固めなさいよと、語るのです。経営も人生も、人間が人間として創るものです。とすれば、人間の本質、生きる目的、人としての大切な生き様を知ろうとしなければ、人生の意味を理解できません。正しい判断もできない。そのことをこの若者たちは理解しているだろうか？心配はいらないな、と思いました。さまざまな出来事との対話、その経験が、この優秀な若者たちを正しい人生観に導いてくれるでしょう。船井先生の言葉とともに。「知らないことを知る、それが勉強です。正しい生き方を知る。それが勉強なんです。勉強をすると夢と希望をもつことができます」そのとおりだよと、目の前に座る若者に声をかけたくくなりました。知らないことを恐れなくてすべてのことを必然、必要だと信じて学びなさいよと。「自分がいま取り組んでいること、そしてこれから取り組まなければいけないことに生命をかけて励みなさい。君たちの成長のために」先生との 25 年間で次々と脳裏に浮かんで消えて、胸をさざ波のように揺らしています。いま、この瞬間は私のためにあるのだと、思えました。船井先生の笑顔が、1980 年 11 月 17 日のあの夕方の幸福な心を、私の胸いっぱい運んでくれていました。

著者は、25 年経ったその日、後輩に話しながら何を確信していましたか？

()